

なぜ「43項目の質問状」は生まれたのか

～部落差別をなくす反差別のなかまづくり～

文責 森山 英治

1、であい ～子どもたちの笑顔が素晴らしい～

みなさま、こんにちは森山です。よろしく申し上げます。このような機会をいただきありがとうございます。お疲れのところ、みなさまとのであいを大切にしたいと思えます。

最初のあいさつで「あなたがすき、私がすき、美咲野小学校がだいすきと～

「ありのままのあなたでいいんだから、あなたを大切に思っている人が必ずいる。」

悲しいこと、せつないこと、苦しいこと、嬉しいことなど、一緒になって肩をふるわせることができる、自分の思いを語るができる。隣にいる人の悲しみや喜びが聞こえる。見える。そういう語り合えるなかまをともにつくっていきましょう。とあいさつをしました。子どもたちに明るい未来を用意すること、それが私たち大人の責任です。

780名近い子どもたちが、顔をしっかりあげて聞いていました。

出会いは優しさとの出会いですね。隣の人にこころを馳せる力です。人の痛みが自分の痛みとして分かる。小学校が大好きになりました。教員生活40数年はじめての小学校、3年目になります。今年は5年1組40名とても素晴らしい子どもたちです。

算数・難しいですね、合同、ぴったり重なる。形だけでなく、心も重なる。私とあなたが重なる。あなたとあなたが、こころが一致する。しかし、楽しくできました。昼休み職員室に四つ葉を持ってきてくれました。先生が幸せになるようにと、子どもたちが優しい。

子どもたちの笑顔が素晴らしい。

わたしがいつも大切にしていること

①であい … 子どもと向き合うということはどういうこと
子どもと向き合うということは、子どもの姿から学ぶことです。
学ぶとは、まず子どもの話をじっくり聞くこと…
認め合うことが大切になります。

②子どもの事実から出発するということ
いじめ・不登校:子どもの声をいっぱい届けること。
声にならない声を届けること。

③子どもの背景をとらえるということ
子どもの暮らしを見つめること、差別が一番見える位置、
家庭訪問です。

- ④立ち位置 …… いつも子どもの隣に座っている自分がいるのか？
自分自身の生き方を示す。いじめや差別は絶対許されない。
- ⑤つながる …… 子どもを「見つめ」自分を「綴り」なかまに「語る」
「見つめる」とは・くらしを見つめる。
「綴る」とは・くらしを綴る。
「語る」とは・くらしを語る。

なぜ43項目の質問状は生まれたのか。昨年は県人教結成50年になります。

2、1976年〇〇就職差別事件がおこります。

熊本においては、この1976年を契機として、教育行政、労働行政を含め、職業紹介に終始していた「進路指導」から、部落解放、人間解放に連なる「進路保障」への転換が求められ、熊本の進路保障の取り組みが動き始めたのです。

熊本における進路保障は、1976年の〇〇就職差別事件に端を発します。

「なぜ、不合格になったのか、私には分からない。思いあたるのは、部落だけ。二度と〇〇が差別しないためにも、なぜ、落ちたのかをはっきりさせてほしい。」

父を早くなくし、母に育てられた部落の生徒は、「安定した職場を」と考えて県内最大のバス会社・〇〇を受検しました。面接でも問われるままに正直に答え、「落とされるような心あたりは全くなかった」彼女がこう訴えてきました。1976年秋のことでした。熊本の就労保障の起点となった事件です。その後、あらためて合格を勝ち取った10人の子どもたちは、ひとりとしてこの企業に入社していきませんでした。そして、「私は父を許せない。母のようになりたくない」、「もう熊本には帰りたくない。あんな目に会いたくないから・・・」と、父や母を、生まれたところを恨む言葉を残したまま、故郷を捨てざるを得なかったのです。

「われわれ部落に生まれた多くのものは、仕事がつらくて泣いたことはない。仕事がなく、それを探すのに泣いてきたんだ」と、公開行政指導の席上で訴えられた白髪の古老の叫びは、企業や行政だけに向けられたものではありません。仕事を奪われ続けてきた部落の親と子どもの怒りと熱い願いを私たちの教育実践の根底にすえないかぎり、「差別をふみこえていく教育」を実現することはできません。

会社側には、その差別性を認めさせました。そして、不採用処分を撤回させるというところまではいったのですが、子どもたち自身が、なぜ面接時に違反質問に答えたり、言ったらいけないのか、という事について理解できるところまで学習できていなかったのです。つまり自分が違反質問に答えてしまうことが、違反質問に答えられない、言えない子どもたちを差別することになるんだという事に、やっと気付きはじめた段階でした。

また、この就職差別事件に直面して、初めて「統一応募用紙」というものの存在をつよく意識させられることになりました。「統一応募用紙」は、進路保障の根幹をなすものなんだと、やっと理解ができた段階になったわけです。この就職差別事件に学んだ教師や生徒達の力で、違反・差別選考を撃ちながら「統一応募用紙」が定着していくことになります。

熊本においては、この1976年を契機として、教育行政、労働行政を含め、職業紹介に終始していた「進路指導」から、部落解放、人間解放に連なる「進路保障」への転換が求められ、熊本の進路保障の取り組みが動き始めたのです。

この事件は・・・わたしの課題だと思いました。

①「私かなぜ落ちたのかわからない。思いあたるのは部落だけ。私かなぜ落ちたのか明らかにして欲しい」・・・この事件をわたしは、自分の課題として受け止めました。

②就職差別から生徒たちを守れなかった。

③最大の原因は =差別が見えていなかった
=生徒たちの生活やくらしが、親の仕事や労働が見えていなかった
→見ようとさえしていなかった。

④「親を憎まんでもいい教育をしてくれ」
「ふるさとを恨まんでもいい教育をしてくれ」



①親を誇れる教育をしてくれ、
それは親子のきずなづくりです。

②ふるさとを誇れる教育をしてくれ、
解放子ども会活動を要に、解放運動につながってほしい。
解放教育につながってほしいという願いです。

③子どもたちが、その思いをともに共有し、ともに闘う、反差別のなかまづくりです。

ここで「言わない・書かない・提出しない」取組が生まれてくる。すごいことなのです。
自分の課題として、差別をなくす具体的な行動として、どうしたら、「言わない・書かないのか・提出しないのか」・・・

それは、「言わないのではなく、まずは語ること」
「書かないのではなく、まずは綴ること」
「提出しないのではなく、提出すること」

そのことをみんなで共有するから、なかまとして実践するから、「言わない・書かない・提出しない」取組になる。

そのなかで、進路公開が生まれてきたのです。

43項目の質問状がでてくる。ひとりの思いが、ひとりの課題が、自分の自分たちのひとり、一人の課題につながっていく・・・反差別のなかま、集団づくりなのです。

差別が見えなかったら、差別をなくす行動にはつながらないんです。差別が一番見える位置は、自分のくらしの中にこそみえるわけです。だから、自分のくらしを見つめる。
くらしを綴ることから、親の誇りが見えます。親子のきずなができてきます。くらしを語る
ことから、なかまの誇りが見えます。なかまとしてつながってきます。

それが、進路公開です。進路公開は、自分が誇れる。自分のふるさとが誇れる。差別をする側が問われていく営みなのです。

3、「先生の進路を公開して下さい」～1976年〇〇就職差別事件から10年後～

進路をただ単に進学や就職の問題として考えるのではなく、自らの生き方の問題として追求してきた。「言わない・書かない」とりくみもその方向で取り組んできた。そうしたなかから、差別
5 と真正面から向き合い、差別を許さず、闘っていく生徒も育ってきた。しかし、「言わない・書かない」とりくみが3年生の就職時点でのとりくみに終わってしまったり、依然としてタブー指導の域をでない状況も残念ながら多い。そうした状況を切り拓き、“生き方としての進路”を考えるため、今熊本県内各地域で進路公開の取り組みが進めはじめられている。それは、単に自分の進路先を公開するということではない。なかまと共に生きることをめざして、親の生活や労働と
10 それにつながる自分自身を見つめ、その目の深さ、豊かさをクラスの中で確かめ合い、差別とたたかう自分の生き方を確立していこうという集団の営みである。

「進路を公開し、仲間として互いに励まし合い尊敬し合う強い心を持ちえるクラスにしよう。」と

15 4月の当初、学級開きで第一声をあげた。対話帳、班ノート、学級だより(なかま)によって、日常生活の課題を大切にしながら普段の対話、家庭との関わりを多く持つことを常としてあゆみはじめた。さらに、副担任との連携を密にし、互いに生徒のことで語り合う日々を重視した。

数年前からはじまった進路公開の意味するものは何か。幾度も幾度も自らに問いただした。一人ひとりが現実に重くのしかかっている課題を明きらかにし、その場を乗り越える力をつける
20 とともに、生きる展望を見いだしていくことであろうと考えた。一つのくぎりとして、文化祭への取り組みまでを、すべてをありのままにだせるための土壌づくりとした。

11月の文化祭では、是非劇をやりたいというクラス全員一致のもとで、一学期に平和学習で取り組んだ『解放劇』をすることを決め、脚本、配役、衣装、効果、練習等が次々と自主的に
25 組み込まれていった。

「お母さんの和枝さんの役は私がしたい」と家庭の離婚問題で揺れながら自殺未遂にまで追い込まれていった貴子は、まさきに自作詩を親への思いと重ねながら、ステージの上で熱演していった。その後も、交流委員会のリーダーとして、その責務を果していった。「養護学校との交流というものについて考えるようになりました。みんな同じ学校の同じクラスで勉強すれば、
30 『交流』なんて必要ないと思います。」と言える仲間を増やし、自主的活動を広げ、深めていった。「差別は絶対にいかん、先生、私も集会所に行ってみたいです。」と人権委員会の柱となっている好美は、学校を休みがちな恵子の自宅まで、加代子、幸美、さゆり、数人の仲間とともに、「あんたがこんなら練習は、はじまらん」と、姿勢を促していった。恵子は劇が終わって、「ステージの上にあがると緊張してしまって、でも皆大きな声がでて、良かったと思います。」と感想を述べ、次第に学校へ来る回数も増え、その後、進学への自身を徐々に強めていった。この頃から、
35 一人ひとりが自らをみつめ、互いにぶつかり合う姿がでてきた。

文化祭が終わり、クラスでは家族のくらしをみつめてという課題で取り組みがはじまっていた。

40

4、「子どもたちのたたかい」～自らの生き方を求めて～

1986年「43項目の質問状」と反差別の学級集団へ ～進路公開のとりくみ～

45 「自らのくらしを見つめ直すことから出発し、なかまとともに互いに磨き合うなかからこそ、自らの生き方が問われ強くなれることを子どもたちに考えさせたい。さらに親やなかまの思い、願いを共有できることこそが人間としての優しさであり、たくましさでもあることを子どもたちに伝

えたい。「進路公開」とは、親を誇り、自分を誇れることです。親子の「きずな」づくりです。ともに語り合い、認め合う「なかまづくり」です。部落差別をはじめさまざまな差別を許さない、反差別の生き方づくりです。そのことを集団として表現したのが小国中学校の子どもたちでした。行動でした。

5

ひとりの生徒が就職の決意を語っていったその日の夜七時半、突然採用取り消しの電話がありました。その翌日クラスは騒然としていました。すでに彼が話していたのです。「先生。今からその事業所にいけんですか。先生の言っていることは嘘ですか。」とクラス全員が職員室に来て泣きながら訴えてきました。「私たちだけが高校に行けますか。今から貸切りバスで熊本市へ行きましょう。」という声を押さえて、職安を通して解決にあたることで納得してもらい、教室に戻るように話しました。さらに、生徒たちは話し込みを続け「中卒とか母親だけという理由は関係していませんか!もし、しているのならそれがどうしていけないのですか」など四三項目に及ぶ質問状をつくり、それを持って会社に行くことを迫りました。午後四時も過ぎ、半ば諦めの弱気に鞭打ちつつ明日は行くかと生徒たちと話しをしていた矢先、事業所と職安からそれぞれに不採用取り消しの電話が入りました。クラスの中で一斉に大きな歓声と拍手と泣き声が入り混じって響きました。この時ほど、喜びを感じたことはありませんでした。

10

15

私は(担任は)、「進路公開とは、ひとりの生徒をはじめみんなが自らのしんどさを語ることによって、そしてその苦しみを互いに出し合えることによって、本当にきつい子、しんどい子どもの気持ち分かり合えることじゃないかと思う。それは差別が現実にあるという認識を自分のものにする営みである。さらに、自らが語ることによって、自らを強くし、本当のなかまを見だし、反差別の位置に立ち、闘っていく集団としてなり得るからである。と同時に、人のたくましい生き方に触れることによって尊敬の念を抱き、自らの生き方が励まされるのではないだろうか。そして、あなたたちはまさに彼のことで怒り、連帯して闘ったではないか。最低賃金法の改正という理由で切れようとしていた彼を、なかまとして切らせなかったではないか。進路公開とは、常に人間としての生き方を問うものである。」と生徒に話し終わっていました。

20

25

私たちは、事実に向き合って、その子のくらしを見つめることを通して、子どもたちを強くし、自らの変わり目を明らかにする中で、人の温かさ、実践の確かさに出会うことができました。それは、新たななかまとの出会いでもあります。なかまの姿から見えてくる差別への恐れ、悲しさ、怒りが切々と伝わり、一緒に肩を震わせる。その時、一番なかまが見えてきます。なかまが見える。それは互いに自らを明らかにし、語り合うことからスタートします。そこに人権教育の魅力があります。

30

このように「進路公開」とは、子どもたちが、単に進路先を発表することではなく、なかまとともに生きることをめざして、親の生活や労働とそれにつながる自分自身をみつめ、その目の深さ、豊かさをクラスの中で確かめ合い、差別とたたかう自らの生き方を確立していこうとする、「集団の営み」です。そのことが、卒業時における進路先の斡旋ではなく、進路保障の実践の内実である、「部落解放」、「人間解放」に向けて自立する人間を育てることにつながるのです。

35

さらに、「進路公開」の取組がクラスから学年へ、学年から学校全体へ、そして家庭・地域へと拡がり、保幼・小・中・高のつながりの中で、社会全体への拡がりとなるよう進めていきたいと思います。そして、「進路公開」をはじめとする、一人ひとりの子どもたちの進路を保障する営みを重ね合い束ね合うことが、やがてすべての人が差別によってきり離されることなく、地域の中で生きやすく、学びがいや働きがいのある、まさに人権文化に満ちあふれたまちづくりへの創造へと結実していきます。

40

5、「声にならない声を聞き取っていきましょう」

差別が見えなかったら、差別をなくす学習にはなりません。

差別が一番見える位置とはどこですか。それは自分のくらしのなかにこそ見えるのです。

5 差別をなくす学習は、差別をなくす行動につながらなければ意味がありません。

行動は、自分の課題だから行動できるのです。では、自分の課題とは何ですか。

実は「これが『進路公開：生き方』実践なんです。

徹底して、こだわって、ひとりの子どもとかかわりきることなんです。

10 これが進路保障です。

進路公開もすんで、公立高校の入試、卒業を控えていた2月22日（日）早朝、自宅に於て信一は脳内出血で倒れ、公立高校の入試日に、深夜8時間におよぶ大手術を受け、何とか一命は取り留めた。しかし、半身不随で歩くことも文を書くことさえも困難になっていった。

15

そして、日々リハビリを続けた結果7月31日に退院することができた。まる5ヶ月後の帰省であった。今、歩くこと、文字を書くことに喜びを感じて、新たに高校への意欲を強めていった。

《 信一さんの綴り 》

20

2月22日入院 朝、起きて、トイレに行こうと思って、立とうとしたら、右手・左手が動かなかった。それで、おかしいと思い病院にいった。とてもきつかった。そして病院に着いたとき、気絶した。その後は、何も覚えていない。ぼくは1週間記憶を覚えていない。「ぼくは死にたい」と言ったそうだ。全然記憶になかった。

25

3月12日手術 午後2時から8時間かかった。

森山先生と家入先生がきてくれていた。でてきたのが午後10時だった。

4月1日から、大分の湯布院の厚生年金病院に移って、リハビリが始まった。

30

「ぼくは高校の受験を受けられなかったけど、年上の人たちと友だちになれたし、いろいろ教えてもらったし、」高校で体験できない、貴重な体験をしたと思っている。学校の勉強よりも先に社会勉強をしてしまった。でもこの体験を忘れないつもりだ。

ぼくが湯布院に入院している間に、とうちゃん・かあちゃんがきてくれた。湯布院に来るときは、朝1番のバスと汽車を乗り継いで来ていた。だから、もうこなくてもいいよと何度も言ったが、やっぱり来てくれた。だから、一生懸命頑張ってきた。

35

父ちゃんがこういった。「お金はかかったけど命があって良かった。」涙がでてきた。父ちゃんはもう52歳、たくさん借金があった。母ちゃんは、40歳、「きつくなってきた。」と二人とも言う。

7月31日退院した。働きたいが体が・・・

40

その時、森山先生から「集会所に来ないか。」と言われた。「高校に行こう」と、それから、高校受験のため頑張ることにした。集会所に行くことを決めた。

クラスのみんなか信一が1年後に高校に来るのを待っていた。

体が不自由な信一のため、自分のため高校を変えるといって、信一は、なかまから1年遅れて高校を卒業していった。..連れ合いと一緒に学習会。

進路保障とは・・・

ひとりの子どもと徹底して関わり続ける。自分のふるさとに誇れる。ふるさとに生きる。ということです。

5

6、「ふるさとに生きる」～解放子ども会とともに～

10 「私の来民開拓団の真相」～今も～

今年大変な雨の中、開拓慰霊祭 8月17日 77回忌

ついでう ことば
追悼の言葉

15 わたし かいほうこ かい さべつ やくそく
私たち、解放子ども会には「差別をしない、させない」という約束があります。

それは、差別は人と人を切り離し、時には大事な命をうばうおそろしいものだからです。

はちじゅうねんまえ くた みかいたくだん ちゅうごく い かたがた
八十年前、来民開拓団として中国に行かれた方々は、

20 こ くろう
「子どもたちには、苦勞はさせたくない。」

こ さべつ う
「子どもたちには、差別を受けさせたくない。」

じぶん こ しあわ かんが ちゅうごく い し
と、自分のことよりも、子どもの幸せを考えて中国に行かれたことを知りました。

かいたくだん かたがた こ しあわ おも
開拓団の方々も、子どもたちを幸せにしたかっと思ひます。

25 はちじゅうねんまえ いま かぞく あいじょう か
八十年前も今も、家族の愛情に、変わりはありません。

もし、部落差別がなかったら来民開拓団はなかったし、私たちと同じ子どもまで、命を
お 落とすことはなかったでしょう。一つしかない大切な命、家族の幸せ、それが差別によ
30 って、こわされたのです。

わたし いのち せんそう さべつ にんげん だ
私たちは、みなさんの命をうばった戦争と差別をにくみます。そして、人間がつくり出し

た、戦争や差別は、私たち人間が、なかまといっしょに、なくしていきます。

35 かいたくきれいさい はじ にひやくななじゅうろくめい かた な しちねんご
この開拓慰霊祭が始まったのは二百七十六名の方が亡くなられてから七年後のことだ
と聞いています。生活が大変な中でも供養を続けたいと願われた遺族の思いを心にき

き わたし かいほうこ かい かいたくきれいさい ともしび う つ
ぎみ、私たち解放子ども会は、これからも、開拓慰霊祭の灯火を受け継いでいきます。

40 わたし みまも
どうか、これからも、私たちのことを見守っててください。

にせんにじゅういちねん はちがつじゅうしちにち
二〇二一年 八月一七日

かいほうこ かい だいひょう
解放子ども会 代表

「各地に灯された解放子ども会の中で、親のくらしや労働と向き合うことを通して、ふるさとが好き」と胸をはる子どもが育ってきました。

その子どもたちを中心にして、自分のくらしを見つめ、語り合う実践を通して、互いに尊敬しあうなかまづくりができてきました。

5 解放学習会は、教師にとって自らの生き方、人間としてのありようを問う人間変革の場でした。

私も識字学級に関わる中から、自分自身を見つめ直し、自分自身に誇りを取り戻した喜びがあります。家族への誇り、ふるさとへの誇りにつながっていきました。

誇りを取り戻す喜びが識字運動だと思います。

10 識字学級との出会いほど、人間を変えた教育の場はなかったと思います。

今、「部落」を語る必要性とはなにかと思いますと、「部落」を語らなければ、部落問題学習が子どもたちの意識に残らないのではないかと危惧しています。

15 当然、部落差別とは何かが分からなければ、差別を解消しようとする問題意識は形成されません。「部落」が語られていない要因は、「部落史から部落問題を教える」取り組みにおいて、水平社設立以降、とりわけ現在の部落を焦点化した実践が乏しいことにあると思います。それが、「部落」にリアリティーを持たせにくくさせており、地域と密着している小・中学校では、大きな壁となっているとも感じられます。だからこそ、今一度「部落」を語り、「自分」を語り、「家族」を語り、「来民開拓団の真相」を語ることだと強く感じています。

20

7、「来民開拓団の真相」とは

25 来民開拓団は、1941年5月から1945年8月にかけて、旧「満州」、現在の中国東北部の吉林省扶余県五家站町に入植した。この開拓団は8月17日、敗戦の混乱の中、開拓団全滅という「満州」移民史上例のない非業な最期を遂げなければならなかった。ただ一人の伝令者を残して、276人全員が集団自決を遂げたのだ。そのほとんどが部落の人たちだった。

30 敗戦時で82戸316名にのぼった来民開拓団は、その9割が部落からの入植者だった。このうち7割が来民町（現在の熊本県鹿本町）の部落から、あとの2割が山鹿や植木、鹿央、玉名、菊池など周辺の地域から参加した人たちで、そのほとんどが親類縁者だった。なぜ部落の人たちが中心だったかという、来民開拓団が融和政策によって送り出された開拓団だったからだ。

35 部落差別の結果、国は名指して熊本県の中からただ1カ所、資源調整事業の特別指導地区に指定し、強制的に中国侵略戦争に動員した。そして、敗戦となるやこれを見捨てて孤立させ、集団自決に追い込んでいった。その最大の犠牲者は、何の罪もない幼い子どもたちで、半数以上が15歳以下の子どもたちだった。中には生まれたばかりの赤ん坊や母親の胎内に宿ったばかりの新しい命も犠牲になった。

40 しかし、この「部落の人たちが満州に送られて自決した」という「真相」は、長い間ずっと闇の中に葬られ続け、県も町もそのことを認めようとはしなかった。そのため「一旗あげようと思って行ったつだけん、戦争に負けたつだけん仕方なか」「こっちの人たちも向こうの人たちに無理なこつばしとらすけん、そんな返しは受けたつは自業自得たい」という誤った見方や考え方もあった。

そのうえ、「来民開拓団は犠牲者ぶっとるばってん、部落だから子どもや女、親まで殺せたんだ」という差別発言もあった。はらわたの煮えくり返るような怒りの中で、自決後44年を経ては

じめて「来民開拓団の真相」を明らかにした(1987年12月17日:“来民開拓団のことを何等かの形で訴えたい。来民開拓団の展示に取り組みたい。”“小学校・中学校・高校・支部一体となって取り組んで欲しい。”と支部長・区長より小・中・高の推進教員・主担者に対し、提起。1988年2月21日:第4回熊本県解放文化祭に於いて展示並びに遺骨収集の署名活動を行う。その後遺族会より聞き取りを始める。1988年10月14日:部落解放同盟熊本県連合会鹿本支部、並びに来民開拓団遺族会により「旧満州来民開拓団」の記録「赤き黄土」の発刊につながる)。当時の来民町議会の会議録に、来民開拓団が融和政策によるものであったこと、国策にそって国・県・町・融和団体が一体となって送り出したことがはっきりと記されていたことを確認したのだ。

5
10 いったい来民開拓団は「誰によって、誰のために、何のために編成されたのか」「なぜ、集団自決を、非業な最期を遂げたのか」「なぜ、開拓慰霊祭が子どもたちを中心に行われ、引き継がれていっているのか」。これらのことを明らかにしていく動機となったのが前述の差別発言であり、鹿本支部を中心とした部落側の怒りだった。

15 開拓団の真相を明らかにする活動によって、鹿本支部や遺族たちの手で『赤き黄土—地平からの告発来民開拓団』という一冊の本として出版され、さまざまな人々からの証言・公的資料によって真相が浮き彫りにされた。つまり、来民開拓団は国家の重要政策と結んだ融和政策と農業政策(分村計画)にもとづいたものであること、その基本は資源調整事業すなわち部落を旧「満州」に移すという融和事業であったことが明らかになったのである。

20 来民開拓団が目指していたのは“差別と貧困からの脱出”だった。そうした解放への夢と願いを巧妙に利用し“差別なき新天地”という幻想をふりまきながら、その裏には、開拓団の人たちを中国人に対する差別抑圧者として駆り立てていったのだ。これこそ来民開拓団の悲劇の最大の原因であった。

「憎むべきは、恨むべきは戦争であり差別である」

そのことを来民開拓団の人々は、かけがえのない276柱の命をかけて教えてくれているのだ。

25

30

35

40

8、これからの進路保障をつくる

①50年間のこれまでの取組からの、学びとは、課題とは、

さらにどう取組、どう変わってきたのでしょうか？

また変わっていないものは何か？という視点からも考えます。

50年間は・・・事実と実践で確かな「であい」と「学び」からの創造その中から、くらしをみつめ綴り語り合う反差別の集団づくりの取組がでてきます。

差別をなくすというのは、差別をする側の課題を明らかにしていく、差別をする人が変わる。自分の差別が見える。自分の変わり目を明らかにしていく、自分が変わり続けていくことで、人を変えることではないのです。

それを、誰がするのではなく、自分が本音で本気で取り組むことがたいせつ。自分のためにする。そういう視点がうまれてくるのです。

それは、部落差別の現実に学び続けていくこと、どの位置に立ち続づけいくのか、くらしを見続けて、自らを語り、反差別のなかまづくり、こだわっていく・・・教育の内容を創造しましょう。

②これからの50年は何をめざすのか・・・

課題として、何を創造していくのか？少しずつ明らかにしていこうと思っています。

差別をする側の課題、なぜするのか？もっともっと、問われていく。

その変わり目を共有することがたいせつです。

差別が、差別を受ける側の責任にされてきました。

する側の問題や責任が問われない。

する側の問題として、もっと指摘をすることがたいせつです。

それが優しさなのです。

差別の構造を、仕組みを明らかにして、差別してきた、差別をする人の悲しさが見えて、ともに差別をなくすなかまとして、行動しましょう。